寄せ太鼓

北九州市立長崎街道木屋瀬宿記念館運営協議会広報部会
北九州市八幡西区木屋瀬三丁目16番26号(〒807-1261)
TEL 093-619-1149
FAX 093-617-4949

能教室も同時開催 第四回 こやのせ座 能

「こやのせ座」三月の恒例行事、第四回「こやのせ座・能」を別記の次第にて執り行なわせて戴きます。

今回の演目は〔竹生島〕ですが 初めてご鑑賞戴く方やお子様にも解り易い様 現代語訳本を配布の上 観世流能楽師（シテ方）森本哲郎氏による解説もございますのでお楽しみ下さい。

又 次代を担う小・中学生に日本の古典芸能「能楽」を体験させ 日本の歴史・文化に対する理解を深める事を目的として「親子お能教室」も昨年に続き開催致しますので奮ってのご応募をお待ちして居ります。

尚 当日には「こやのせ座」ボランティアによるバザー（うどん・ソバ・カレーライス・コーヒーなど）の用意もございますのでご利用の程宜しくお願い申し上げます。

こやのせ座運営部会長 柴田泰助

■日時 平成18年3月5日(日曜日) 午後2時～午後4時頃(午後1時開場)
■場所 北九州市立長崎街道木屋瀬宿記念館「こやのせ座」
■料金 一般―前売三千円（当日三千五百円）・学生（高校生以下）―前売千円（当日千五百円）

12月3日(土) 4日(日) 子供 ゑびす頭

郷土の伝統を今に受け継ぐ伝統行事

須賀神社にて子供ゑびす祭りが行われました。この行事は、江戸時代武家方が行う「元服」行事に倣って町民方が行ったものと言われ途切れる事なく続いている伝統行事です。

今年は19名の児童により行われました。初日は好天に恵まれ、赤山、青山2台の山笠を曳いた後、御神幸行列、社宝を持って全町内を回りました。翌日は一転して雨の中保護者の方が寒い寒いと震える中、子供達はさすが風の子、元気よく山笠を曳いていて、祝い膳（江戸時代、大名に振舞われたもの）につきました。

今回、子供たちがこの行事を経験した事で伝統文化、郷土とは何かを感じてくれたことと思います。木屋瀬の男児にとっては大切な伝統行事として絶える事なく受け継がれていかなければと心から願っています。

最後になりますが、準備の段階から山笠解体まで御協力頂いた多くの方々にお礼申し上げます。

世話人 岩尾二郎

※入場は小学生以上に限らせていただきます。
※チケットは、ローソンチケット・木屋瀬宿記念館にて販売します。又、電話での予約も記念館にて受付ますので、詳細は左記へご連絡下さい。
●連絡先●
北九州市立長崎街道木屋瀬宿記念館
電話 093・619・1149

▼こやのせ座・親子お能教室▲

■日時 平成18年3月5日(日曜日) 午前10時30分～
■受講料 無料
■申込方法 2月7日から電話（9時～17時）でお申込みください。
■定員 50人(申込順)

※お能教室に参加した小中学生の「こやのせ座能」観覧料は無料です。

阿部王樹と河豚展のお知らせ 2月26日(日)まで

平成18年1月21日(土)から2月26日(日)まで、みちの郷土史料館・企画展示室において「阿部王樹と河豚展」を開催中です(月曜休館)。

今回の展示では、木屋瀬にゆかりのある近代筑豊俳壇の主・阿部王樹の遺した河豚にまつわる書画約十三点と、八幡西区在住の寺崎潜氏が製作した河豚の剥製約三十二点を併せて展示します。

皆様のご来館をお待ちしております。

「河豚掛軸と銘酒 豊の秋」 王樹次男 阿部東吉

平成五年（一九九三）長男が松江の老舗蔵元米田酒造の末娘様とご縁を戴くことになり私ども夫婦と本家の定吉兄と連れ立って結納を持参した。

出雲空港からタクシーで松江まで宍道湖沿いを走り、玉造温泉入り口付近で兄の話、温泉旅館の名前はわからぬが相当な昔消防関係で玉造温泉まで繰り出し豪遊、しこたま銘酊して大きな河豚の画をあばれ描きしたらしい。

王樹が生前にこのような米田家とのご縁があったなら日本酒大好きの父のことどんなにか喜んだことだろうと連想しながら程なく米田酒造玄関に到着、そのまま招き入れられた座敷に結納の品を並べ、女房がすすめる王樹画「河豚前向き」の袱紗を掛けて幾久しく祝いの口上を申し述べた。

口上の間、米田家のご両親が「河豚前向き」の袱紗を注視されていたのを見て定吉兄が父王樹の作でございますが、玉造温泉のいずれかの料亭旅館で大きな河豚の画を描いたらしいのですと話し終わらぬうちにすかさず米田夫人が「保性館」云うのじゃありますまいか？続けてそうです保性館です、いま思い出しましたと兄。

夫人の話では、保性館と米田家は親類筋にあたり現当主は少年時代もつぱら保性館で暮らしておられたとか。かくして昔ばなしに花が咲き和やかなうちに河豚掛軸と米田酒造、保性館との不思議な出会いに時間の経つのも忘れた。

話は遡りますが、日中戦争の真只中（昭和十四年）直鞍消防斑から警防団組織に改組創立され王樹は副団長に任じられたのを期に玉造温泉「保性館」に豪遊し、酒に肴に〝泥鰌すくい〟に興ずるや即興で『初坐敷百樽の酒 立処』と賛を添えて暴れ河豚を描きあげた。

思うに六十年以上も前に保性館と米田酒造と阿部家のつながりがこうなることも知らぬまま王樹は銘酒「豊の秋」にぞっこん酩酊していた。

いや、王樹自身はこうしてこうなることを予期していたのかも知れない。

ほどなく王樹三十三回忌の「子供の日」が来る。

熱 気が溢れる いろはかるた大会

早 五回を迎えた《木屋瀬いろは歌留多》大会ですが 回を重ねる毎に盛んとなり 今年は老若男女合せて百五十名もの参加者の熱気で「こやのせ座」は大いに盛り上りました。

今年の入賞者は 小学生の部―優勝（萩岩絵梨花・木小五） 準優勝（萩岩花蓮・木小三） 三位（大原萌萌・星小三） 三位（栗田奈津希・星小六） 一般の部―優勝（中原浩和） 準優勝（千々和香代） 三位（藤裕樹・木中一） 三位（藤川翔平・木中二）と云う結果でした。

尚 木屋瀬の伝統文化の継承に尽され今日ある「町づくり」の礎を築かれた（岩井屋不彫さん）の其の作品《木屋瀬いろは歌留多》に接し学ぶ事により育まれる「郷土愛」こそが〝未来に向けての町づくり〟の源である事を確信し 本大会の発展に取組んで居りますれば 今後とも末永くご指導・ご協力の程 宜しくお願い申し上げます。

又 恒例の須賀神社より差し入れの（ぜんざい接待）ほか 本大会を支える多くの方々のご協力に 紙面をお借りしまして 厚くお礼を申し上げます。有難う御座いました。

こやのせ座運営部会長 柴田泰助

賑 やかに楽しく 筑前木屋瀬宿場まつり

新春のお慶びを申し上げます。本年もどうぞ宜しくお願いします。

早速ですが、第13回宿場まつりの報告をさせて頂きます。

昨年の宿場まつりよりそれまでの文化の日から第一日曜日に変更して最初の開催となり、主催者は日にちを変更した事により今までのように沢山の来場者があるかどうか当日まで大変心配の日々が続きました。しかしそんな心配も吹き飛ぶ程の当日の来場者に一同感謝致しております。

祭りの内容も「踊りまくる」と前号の予告に相応しく参加団体（踊り手）はもちろん、それを見るお客様の心も踊りまくったのではないでしょうか。さらに、街道にはさまざまな出店も並び、まさに昔はこうであっただろうという程の街道筋の賑わいで、ほんの一日だけ当時にタイムスリップした気分になりました。

それもこれも、祭りを運営する町民みんなの力が不可欠の中で、協力しあい来場者に楽しく一日を過して欲しいという気持ちが祭りの成功に繋がったと思います。

今後も新しい企画を交えながら、11月第一日曜日は木屋瀬宿場まつりの日が定着し、今年も遊びに行きたいと思われるよう20回30回と続けていけるように頑張っていきたいと思います。

K・Y

香月中学校吹奏楽部 全国銀賞の栄誉！

木屋瀬宿場まつりに出演していただいた香月中学校吹奏楽部は、昨年12月17日に行われた第三十三回全国マーチングバンド・バトントワリング大会において、4年連続の出場を遂げ、全国銀賞の栄誉に輝きました。本当におめでとうございます。

収蔵庫蔵出し展が終了しました

平成17年10月22日(土)から11月27日(日)まで、みちの郷土史料館・企画展示室において、企画展「収蔵庫蔵出し展」が開催されました。

この企画展では、当館が収蔵庫に所蔵する数千点の資料の中から厳選した資料約50点を展示しました。

旧木屋瀬郷土資料館以来の展示となる資料も多々あり、当時を懐かしむ方の姿も見られました。期間中の来館者は728人でした。ご来館ありがとうございました。

木屋瀬宿記念館の利用状況

平成13年1月1日に開館して以来、多くの人に利用され愛されています。

平成17年1月～平成17年12月まで

	みちの郷土史料館	こやのせ座など
1月	595	1,179
2月	519	335
3月	692	1,226
4月	904	1,024
5月	1,142	1,293
6月	489	884
7月	1,307	1,265
8月	1,603	1,301
9月	386	683
10月	816	1,001
11月	448	1,329
12月	252	713
合計	9,153	12,233

（単位：人）

● 今後も、楽しく面白い企画を予定しております。皆様お誘い合わせの上、ご来館下さい。

受賞のお知らせ

木屋瀬みちの郷土史料保存会（会長 水上裕）は平成18年北九州市表彰（教育文化功労）を受賞しました。

北九州市表彰とは、北九州市の発展に貢献された方や市民の模範となる行為があった方に対して表彰するものです。

おめでとうございます。

編集後記

最近、伝統文化の形骸化という言葉を耳にします。形式を継承することが伝統であるかのように解釈されて、魅力を失った文化も少なくないとか。伝統文化とは古来から伝わる形式、そして精神の両方を受け継いではじめて成立するものであると思います。形式ばかりに目を奪われがちですが、その文化に脈々と伝わる古人の精神・心意気も感じ取っていきたいものです。（た）

史跡短見 ～その七～

《扇天神碑》

木屋瀬みちの郷土史料保存会
会長　水上　裕

木屋瀬社会福祉協議会発行の「社協だよりこやのせ」の17年11月号に、江戸時代の学者伊藤常足翁のことが、井上昭太郎氏の手で詳しく書かれています。その中で扇天神とよばれるようになった由来が常足翁の手で書かれた碑のことを紹介されていますが、扇天神の漢文の碑には「返り点」「送り仮名」なしの「白文」のままで少々読解に難がありますので、今回は「返り点」「送り仮名」をつけて解り易くし、数カ所の解りにくい字を取り上げて「語訳」とし、最後に「口語訳」を書いてみました。

筑紫紀行曰、木屋瀬云所而結草枕。暁近夢二、無誰男、称天神弓賜扇於予止見侍弓覚奴。語同行波、皆寿合。実難有神冥助二社止頼敷南云々。参西府聖廟云々。深野筑前守云人来。此郡郡司也。携扇而心指当社而得此扇事、夢告思合弓最神慮難有南云々。古老曰、世人称木屋瀬天神云扇天神。

（語訳）①助詞の「に」　②助詞の「に」　③助詞の「て」で日本の漢籍には見えず　④「…において」だが、「予」で「ニ」と読んでいるので読まない　⑤「…だと」の「と」　⑥丁寧語「ます」で「はべり」と読む　⑦完了の助動詞「ぬ」で「…して了った」　⑧助詞の「ば」　⑨「ことぶき」で「お祝いをする」　⑩「冥助（めいじょ）」で「神仏の加護」　⑪「こそ」と読み、「…こそ」と強調する　⑫「たのもしく」　⑬「なむ」と読み、強調の「こそ」と同じ　⑭まだ続く文を途中で切り「…とかなんとか」で「ウンヌン」と読む　⑮「廟」の古字で「おやしろ」の意、「ビョウ」と読む　⑯「こころざす」と読み「…をめざす」意

【訳文】

室町時代の連歌師飯尾宗祇の作品「筑紫紀行」に書かれているが「木屋瀬という所で旅寝をした。その夜明け近い夢の中に、誰ともわからない男で『我は天神なり』と言って、私に扇を下さって夢が覚めた。そのことを旅の同行の者たちに話すと、皆『それは末広がりで目出たいことだ。実に有難い神のご加護でこそあろう』と、まったく頼もしいことだ、とか何とか言って喜び合った。その後、大宰府天満宮にお参りなどした。その時深野筑前守という人が来たが、ここを治めている郡司であった。そして扇を持参されそれを頂いたが、前々からお参りを心ざしていたこのお社で扇を頂いたことは、木屋瀬でみた夢が『まさ夢』であったと思い合わされて、神のおぼしめしが有難くこそあった。等々。それからというもの、古老達は、このお社を『木屋瀬天神』とも『扇天神』とも、いうようになったと言っている。」

踊って来ました肥後の国で

熊本城で宿場まつりをPR

「おいでなせぇ木屋瀬キャンペーンin熊本」をかかげて、木屋瀬宿記念館運営部会・広報部会主催、北九州市観光課・木屋瀬宿場踊保存会が協力ということで、総勢30余名が、秋晴れの10月22日（土）にバスで熊本に向けて、繰り出しました。「第10回熊本城まつり」のイベントに、宿場踊が出演することと、会場で北九州市観光のPRと二週間後に控えた「宿場まつり」とをPRするのが目的です。ポスターやチラシ等、詰込んで会場で配布しながらPRしようという訳です。

熊本といえば、加藤清正が熊本城を築城して四〇〇年を迎える二〇〇七年に向けて、本丸御殿大広間の復元工事が、急ピッチで進んでいる様でした。何しろ、城周辺は大変広く計画的に整備された庭や、道路、美しい城壁に囲まれてそびえる天守閣、すばらしい眺望に、ゆっくり散策したい気分でしたが、アップダウンが多く二の丸駐車場から二の丸公園（木陰で昼食）、竹の丸メイン会場までの移動が大変でした。館長さん達PR組と宿場踊組に分かれての行動となり、私達は2時からの出演までステージ横の陽陰を選んでスタンバイ、日差しが強く、踊り終えた時は、汗びっしょりでした。

さすが、天下の「熊本城まつり」だけあって、九州各地からイベントに参加があり、土産物や食堂の屋台も出て大変賑わっていた様です。又広場に設けられた客席では暑さの中いっぱいの観客で、私達も盛んな拍手を受けました。北九州PRということで、小倉祇園太鼓も私達の後に出演、聞き慣れた太鼓の響きを背に一足早く帰り支度をして、しばし美しい城壁を見上げながら、一休みして帰路につきました。宿場まつりのPRを滞りなく終え、熊本まで来た甲斐が有った様です。宿場踊も久し振りの遠出でした。

二〇〇七年の「熊本城まつり」にもし縁が有れば、修復された城内を拝観し、周辺を散策したいと思います。先のことを言うと鬼に笑われるでしょうか。

館長さんはじめ、皆様、慌しい一日本当にお疲れ様でした。

木屋瀬宿場踊保存会　水上真弓

宿場町木屋瀬（こやのせ）。心に郷土が染みてくる。歴史とふれあう記念館。

シリーズ寺めぐり

筑前木屋瀬宿　寺をたずねて

第六回　弁財天

木屋瀬記念館から中島橋の方へ少し行くと、街道の左側に長徳寺が見えます。その長徳寺の参道から須賀神社の裏を通り祇園町に至る道を昔から長徳寺小路と呼んでいますが、その途中に鎮座されていますのが、弁財天さまです。明治初期までは、広大であった長徳寺の境内にありましたが、明治二十四年の大洪水で流され荒廃しておりましたのを、現在の「みちの郷土史料館」の場所で、「若鶴」という銘酒を醸造されていました、酒造家の岩尾石五郎さんが啓示を受けたとして町の有志と相図り、大正十一年に現在地「長徳寺飛び地境内」に堂宇を再建したと伝えられています。何か不可思議な力がはたらいたのでしょう。

「日本三大弁才天」は、広島県の厳島神社の弁財天、神奈川県の江ノ島の弁財天、滋賀県竹生島の宝厳寺の弁才天と言われていますが、いずれも、海や湖に面しており神社と寺に分かれています。弁才天信仰は神道、仏教、民間信仰が混交しているのです。元来は、古代インドの河の神で仏教の守護神の一つです。日本最古の弁才天立像は奈良の東大寺の法華堂に安置されています。木屋瀬の弁財天の歓請時期は分かりませんが、相当古い時代と伝えられています。本尊の弁財天は現在長徳寺の本堂に安置されています。坐像で優しいお顔の心癒される素晴らしい仏像です。

木屋瀬は遠賀川を中心に町が形成され、度々洪水や災害にも遭い、死と常に直面する危険な職業の船頭や殺生を商いとする漁師達の多くが町の住民でした。常に死が日常の生活にあった当時の人々は世の中で起こるすべての現象は刻々と変化し亡びるものであり、又、会うものは必ず別れなければならない道理「諸行無常」の教えの仏教を体感していました。そこで浄土信仰の厚い住民達が南無阿弥陀佛を称えることで、誰でもが浄土に往生できるとする浄土宗の教えの長徳寺の境内に、水の神であり仏の守護神「弁才天」を建立したのもうなずけるものがあります。

江戸時代には、七福神信仰が全国的に盛んで、弁才天の「才」の字が「財」に通じることから財宝の女神とされ人気を博しました。又、河の神であることから、川の流れる音の連想から、音楽神、学芸の神、安産の神、として幅広い庶民の信仰を得ました。木屋瀬の弁財天も水の神の発想からか池を廻らして作ってあります。

弁財天を再興された、石五郎さんは酒造業という「水」を商いの家業としておられたので、そのご縁だったかもしれません。

昔は中秋の名月の頃に、お堂の前に無数の蝋燭を燈しお祭りが行われていました。大変にぎやかで多くのお詣りがありました。私が子供の頃にもご接待でお菓子を振舞われ、秋の夜を満喫した思い出があります。

水神の琵琶奏でるや満の月
天令の縁蝋りし去年今年　慈照

（本町　野口靖彦）

てんこく

「篆刻」ってなぁーに？

木屋瀬宿記念館　寄贈
篆刻額「木屋瀬宿」

古代の印は、みな篆書を刻（ほ）ったもので、篆刻という名称が生まれました。

篆刻は「方寸（はすん）の世界」ともいわれ、その中に文字学、文学、書、絵画、彫刻の要素を盛り込んだ総合芸術です。

篆刻でいう「印」と、一般の人々が日常生活の中で使用している認印・実印などの「ハンコ」とは厳然とした違いがあります。篆刻には必ず書としての筆意と美しさがあります。筆で篆書を書くように、鉄筆（刀）で石に書く気持ちで刻すからです。

印には、"印"それ自体を芸術作品として鑑賞するもの（大小さまざま）や姓名印・雅号印などの落款印など多々あります。

身近な年賀状には、干支を表わす印がよく使われています。

簡単に書きましたが、まだまだ語り尽くせない程、奥深いものなのです。

印泥の朱と宣紙の白。この朱白の対比の美しさを是非、一度味わってみて下さい。

文　柴田由美子（青裳）

●略歴
日展入選二回
読売書法展　幹事
全日本篆刻連盟　評議員
西部朝日書道展　評議員
読売女流展　理事
福岡県美術協会　正会員

わたしの昔話

藁（わら）人形祭りと團子雛（だごびな）祭り

遠賀郡芦屋町に八朔の節句祭りがある。初節句の男の子を祝う祭りで、親戚や近所の人々が、藁を用いて手作りした小さな騎馬人形を祝い贈るものである。多くの騎馬人形を数段飾る。男の子の祝いに相応して、勇ましいものである。今では県の文化財であり、芦屋町の貴重な民俗資料としても有名である。

木屋瀬では、女の子の節句祭りに、米の粉を用いて團子雛が作られていた。

近所の人々も次々に加勢に来られるので実に賑やかな事であった。加勢の人は自分の得意な人形から作り、薄板等に固定し、色を付け金銀粉をあしらったりして、美しく可愛いらしくと心されていた。人形によせる加勢人の心に、童心が蘇ったのか若々しく弾む声が満ち溢れ、家の中が香わしく明るかった。

木屋瀬女性の指先作業によって、仕上げられた團子雛さまには、古代木屋瀬を忍ばせる香りが仄かに漂っていて、芦屋の八朔藁人形に劣らない民俗資料であったと思われる。

女達の指先奉仕だけで事足りる、團子雛祭りや藁人形祭りのような、小さな祭りから大掛りな祭りに至るまで祭りの行事には、信仰的な安らぎがあり、解放的な自由があり、人々と溶け合う事が出来る大きな喜びがある。

祭りは、私達の楽しい心の広場であり、懐かしい心のふるさとである。

【柴田豊廣遺稿集】より

文化発信の寄せ太鼓。こやのせ座発、全国行き。ホームページ http://www.city.kitakyushu.jp/~k7904180/index.html